

姫路の名庭園

高須隼人書山の香雪園について

長野 哲

(亀山雲平顕彰会会長)

姫路藩家老、三三〇石、高須隼人廣正(号書山)雅号は書写山よりとったといわれる。この邸内にこの名庭園があった。

書山はことのほか、梅を好み、その香りをとくに親しんだ。そしてこの庭を「香雪園」といった。幕末の激動する世の中にあつて、藩の命運を担つて、東奔西走。藩主の意向にそつて、諸事を遂行、全力投球をして、難件を処理解決していった。

書山休養す

文久元年(一八六一)藩主の参勤交代に依り、江戸から姫路に帰り、積年の疲れをいやすように藩主から休暇をゆるされた。

この時藩主より珍しい奇石を賜つた。そしてこの珍石に「香雪園」の三文字を刻し下方に「二五」の碑文を、時の好古堂教授兼大目付の亀山雲平が作文し、同教授の渡辺劣齋が書した。

大きな美事なこの碑石は高さ二メートル、巾一六メートル、厚さ〇、五メートルあり、美しい庭の大きな梅の木の下に立てられ、この名称とした。

好古堂に講義

安政二年(一八五五)、京都守護職松平肥後守容保の家臣・会津若松藩校日新館教授の南摩三郎綱紀(のち東京大学教授)が姫路へ視察に来た時、亀山雲平の紹介により家老高須隼人書山と逢つた。

高須書山に招かれた南摩綱紀は、その庭の立派なのをみて感嘆し、作詩したのがこの有名な「香雪園記」である。

作者の南摩綱紀(号羽峯)は江戸昌平校に於いて、亀山雲平と共に、佐藤一斎、古賀精里に師事していた間柄で、ともに詩文掛として四十余名の学友達の指導に当たっていた。

南摩綱紀は京都に来て、守護職松平容保に従い近畿一円の探索に当たり、しばしば姫路に来たりして、好古堂にて講義した。また松平惇典が詩文輯を発刊した時、序文や跋文を書いたり、また惇典の長男右京が彰義隊に加わり、黒門の戦いに大敗して、酒井家ゆかりの菩提寺竜海院へ逃げこんだ折にもよく面倒を見て貰つたという。

いづれも佐幕派の藩であり、京都所司代酒井忠義と京都守護職松平容保とがいづれも京都の治安を守る役柄であるため、特に共同作業的なムードがあつたと思われる。また雲平、綱紀は昌平校で二人とも優等生でよく気があつた仲であり、生涯二人は交誼が続けられ、今も亀山家には数多く手紙が残されている。亀山雲平が先に逝去しているので、雲平の墓の碑文は南摩綱紀が書いている。景福寺山に墓がある。

将軍慶喜江戸へ帰る

明治元年一月三日京都鳥羽伏見の戦が起こり、四日間の戦闘で新撰組二五〇人の内一五〇人が戦死し、幕府軍は大負けしてしまつた。

将軍徳川慶喜は、守護職松平容保、所司代松平定敬、老中板倉勝静、老中酒井忠博を従えて大坂城から海路江戸へ帰つてしまつた。この時南摩綱紀は藩主の命令で京都に残り近畿の情勢をさぐり

江戸へ報告するようにと言われた。

南摩綱紀姫路藩に入れず

然し幕府軍は総崩れとなり、南摩綱紀の身辺も危険にさらされて来た。身の置き所がなくなつて来たので、海路友藩の姫路へ来たが、ここも大変な騒動のさ中で雲平にも誰にも逢うことができなかった。雲平達重役は、鳥羽伏見に出陣していた兵士七〇〇人が帰城して来ており、また官軍一五〇〇人の岡山兵が姫路城へ攻めて来ており、上を下への大混乱のさ中であつた。南摩綱紀は姫路に来たが町にも入られず、灘地区の獵師の舟を雇つて、淡路・紀州へ渡り、江戸を経て会津に帰りつたという。

好古堂と高須書山

河合寸翁が好古堂を改革し、大いに教育内容を改善充実していった。その後を受け継いで高須書山が好古堂の督学となつて、多くの人材養成に尽力した。特に仁寿山校創立者、河合寸翁が没すると、藩主酒井忠学は直ちに、仁寿山校を廢止し好古堂に併合して、好古堂の大拡張を高須書山に命じた。

書山は、一二〇〇人の藩士の子弟教育の徹底をはかり、優秀な藩士の育成を目指した。のちには、松平惇典が督学となり、菅野白華・亀山雲平など多くの教授たちも、好古堂の興隆に力をそそいでいった。幕末の藩校の一番の活動期であつたといふ。

家老屋敷

藩の重要政策の立案・実行の最高首脳である家老たちの居住する屋敷群は、大手門の東方から西方へと列んでいた。

東方から西方へ
 本多意気揚屋敷
 河合隼之助屋敷
 内藤半左衛門屋敷
 大河内帯刀屋敷
 高須隼人屋敷



位置は城の入口大手門附近にずらりと列んでいて、邸宅は広壮であり、庭も美事なものであったらしい。

庭園記のあったもの

- | | | | |
|------|------|------|----|
| 河合家 | 竹楼記 | 頼山陽 | 作文 |
| 内藤家 | 退思園記 | 亀山雲平 | 作文 |
| 高須家 | 香雪園記 | 南摩綱紀 | 作文 |
| 高須家 | 香雪園碑 | 亀山雲平 | 作文 |
| 高須家 | 塋甲之碑 | 松平惇典 | 題額 |
| 菅野白華 | | 作文 | |

香雪園碑石銘

歳発卯 謙光公賜吾書
 山夫子以此一奇石夫子
 愛護甚至然東役多年未
 答揚其寵光今茲辛酉養
 病於家事務稍閒乃勤以
 香雪園三字立諸庭中梅
 林之下欲永不於戲
 公之恩與石不朽 公之
 德與花香而奉此恩德者
 非夫子其人果誰哉園記
 別有此不復贅

文久紀年辛酉南至日

龜山美和 謹識
 渡部璋 拜書

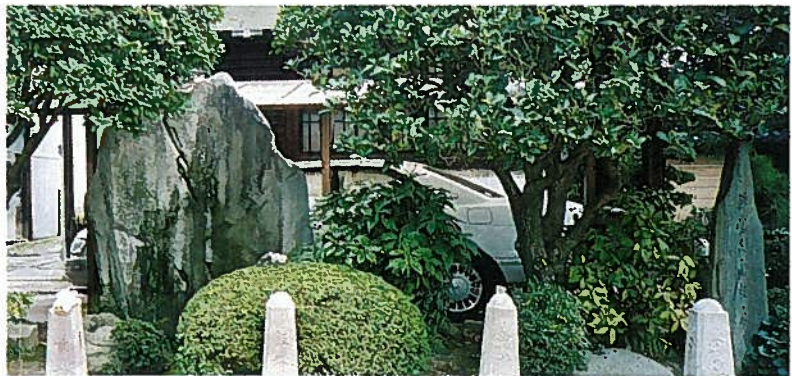
香雪園碑石は姫路市河間町雲松寺に在る
 香雪園記は安政二年会津南摩綱紀作詩
 香雪園碑銘は文久元年姫路亀山美和作詩
 同渡部劣齋拜書



雲松寺

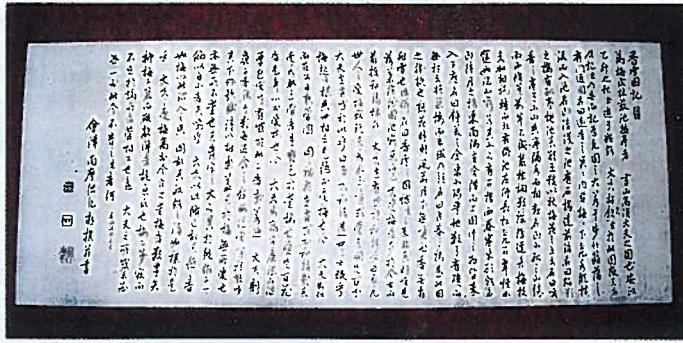
香雪園記

萬梅成林蔽池擁亭者 書山高須大夫之園也 安政
 乙卯之秋余遊干姫路 大夫招飲余於此園徵又名及
 記余乃妄而記焉凡園之大若干安竹離藩之有門通園
 名曰遠香之関々内皆梅々下飛水縦横流而入池名即
 清淺之池有石橋達前渚名曰踏影之橋有孤亭枕池其
 形五稜以狀梅花之五出日嗅香之亭有小山與亭隔水
 而相对名即小孤之山繞而西脩篁數竿不成麓棕欄數



香雪園碑 (雲松寺境内)

株傍逕昇梅枝矣加相接輒而壯右俯池左仰長松飛石翠煙幽邃如深山窮若其北者有石橋西眷塞東配名即待月之橋東南隅有含階而上園中之物皆來入尔座名曰鐘美之舍東北隅平地數々有礎而無村云將築樓而未成乃題名曰占春之樓是此園之稱概也想花時則



香雲園記

風前月下無喚飛香無看飛雪也因併名曰香雪之園憾余之來非其時唯見落葉續粉池寂寞而已夫愛梅者多於今古而最推和清林氏大夫豈有感於和靖呼曰否凡世人之愛梅或玩其秀肌玉膚或賞其聞先百尤大夫豈有感於此乎曰否夫和清遺世之士眠乎梅趣呼楳与世

相忘是隱於愛梅也今大夫則仕而在公日夜管閣國之機務豈有感於和請哉其愛秀肌玉骨者是艷色於豐梅也愛先百花者是爭以於愛梅也今大夫則高古廉潔而溫厚包容豈有感於此二者哉若適大夫則鼻尔香雁干影每退食之餘暇從客宵雅散步其下作歌賦詞以相樂蓋其於梅無所愛也亦無所不豐也其胸宇之大而異於彼依尔一備以自小者矣嗚呼大夫以此脩己故其德之香如梅以此治人之興國故其政務之清如楳於是呼大夫之愛梅高於今古之豐梅者數等矣柳梅尔服而破敵陣者梶原氏也梅尔夢寢而不忘於謫所者菅相公也意大夫之所感未必無一於此今不告之余者何

会津南摩綱紀拝撰并書

妄而間脱名字

瑩甲之碑

高須隼人書山の名庭園には、もう一つの記念すべき出来ごとが秘められている。

安政二年（一八五五）酒井忠頭公が一〇月二日に参勤交代に依り、姫路に向かつていたとき、突然江戸に於いて大地震が起こつた。忠頭公が藩主となつて、初めて姫路に着任する時であつた。

江戸藩邸より早馬に依り、注進が来た。そこで家老の高須隼人は直ちに江戸へとつて返し、昼夜兼行藩邸に馳せ参じた。

然し地震の被害の惨状を見て、愕然としてしまつた。藩邸ごとごとく倒壊全滅してしまつていた。そしてその倒壊した住居跡に発見したのが、先祖伝来の高須家の一番大事な鎧兜のこつぱ微塵に打ち砕かれた姿であつた。

これを見た隼人はこの甲冑は我が先祖の魂魄の留まるところのものであると、熱い涙がこみ上げ

て来て、我が東行に同行したためにこんな役禍に遭わせてしまったことを悔い、こなごなになつた「ヨロイ」を一つ残さず拾ひ上げて、姫路へ持ち帰り、自邸の香雪園の一隅にうずめ、その上に「瑩甲之碑」を建てた。但し現在この碑は所在不明である。

瑩甲之碑

好古堂教授 菅野白華 撰文

同 渡部 璋 書

同 同督学 松平惇典 題額

安政四年（一八五七）丁巳春三月

高須廣正 厩石

瑩甲之碑

松平惇典題額 菅野潔撰文 渡部璋書

安政二年、我公始就封之十月、江都地震、回祿乘之、我邸亦羅災、於是、書山高須夫子、扈駕而在西、星報之日、銜音即發、日夜兼程而至、至則旧物烏有、一場瓦礫、既而 拱篋録、物咸就緒、夫子始取其先世遺甲羅災者而獻欵曰、此吾祖先遺靈所憑者、執忍瓦礫視之、遂 姫路南城相門外賜宅之園、置片石、令潔志之、潔竊謂、陽九有 而未今日之酷也、闔都百万、上自公侯姫嬪、下至庸賤、能免其慘鮮矣、独我公已能 天數固然、耶、抑公家積德鴻運有以致此也、豈偶然乎哉、若夫宮室器械之毀燬、雖云慘哉、要不足深 耳、且此甲嘗從夫子、而東、何故独不從夫子、而西、而自膺此 也、遺甲蓋有靈矣、此亦不可謂之偶然也、哉夫子、藏諸佳城、以示將來、洵亦得宜、古人云不忘先德、垂裕後昆、此之謂也與、

安政四年丁巳春三月 高須廣正 厩石

高須隼人廣正号書山之墓

増位山墓地口に在る

碑文 好古堂教授 龜山雲平 撰文

同 波部 璋 書



高須書山の墓

書山高須府君墓

吾姫路執政世班其首者高須氏而其第九世為書山君君諱廣正字君大通稱隼人書山其別号也父諱定政娶河合氏生君於文化丁丑五月十八日君幼聰慧甫十三歲召見 祇德公於燕寂 公諭以學文講武並有賜□□欲大成其器也既而以嫡子補參政未幾天保丁酉父沒終制襲祿二千石所部士如故尋有命更番聽政弘化甲辰 謙光公館舍 緝光公館嗣位以君為補佐嘉永戊申 公己壯成婚十月十六日加賜祿五百石免其補佐而諮詢如故君自謙柳請免職故有是命己酉以特旨知會計事壬子故將軍慎徳公過 晴光大夫人邸君晨夜駭奔綜理其事九月十三日加賜祿三百石明年癸丑 緝光公捨群臣顯徳公嗣位而亦幼沖矣君以遺命再為補佐又請免知會計事許之尚參其議安政戊午 公婚十二月二十七日准祿三千石賜鑲一領免其補佐而諮詢如故襲 先公例也居項之 公亦以万延庚申薨焉而 閑亭旁公繼立慶応丁卯致仕以伝 新老公當是時世運亦大移 両老公欲一變軍制君素總活軍務則勉勵從事其功未成忽馬羅

病終不趣寔是年十月二十三日也春秋五十一穿於増位山先塋之域君弱冠在職東西干役加以補弼於二世凡會同之事軍旅之命百司諸務其盤根錯節一以身当之当方謙光公時助旧幕府西城土木之役君督其事及功竣賜白銀時服等物其他吾 晴光太夫人及 諸公歲時所賜刀鞍金帛等物亦若干君任重責大既如此然而自公退食常以文史書画自養興至貴描蘭神韻飛動其道遙闊雅亦此類也及病革令嗣宗山君東役不在家遺命家宰処分後事及瞑元配石原氏生一男称新三郎天後絶婚又河合氏実村田氏生一男一女皆夭側室有一男一女長男即宗山君次養於支家高須勝年女適松平某今絶婚今□□己宗山君遺家宰齋狀微銘不可以辭焉乃謹銘白

補弼幼主 兩世一身 夙夜啓沃 以撫欺民

□嘗何問 為国自奮 活乎官海 升沈是運

靈己下士 庶幾樂只 □蘭□擢 芳伝孫子

龜山美和 謹撰 波部 璋 拜書

老岐・対馬研修旅行

写真は小茂田浜に臨む参加者

平成一三年七月一五日(日)ー一七日(火) 山田文化部長を団長として、総勢六七名が参加名護屋城博物館では、宮武正登学芸員より城破却の作法を聞き、呼子でいかの活き作りを食し、フェリーで老岐へ渡海。原ノ辻遺跡では町田利幸主任文化財保護主事より弥生時代の大規模集落遺跡、安国寺では総代より宝物展示・建造物の説明をしていただき、海女の守り神・はらほげ地蔵を見て郷ノ浦のホテルステラコート太安閣で泊。

二日目、老岐風土記の丘と鬼の岩屋古墳では、司馬遼太郎が「老岐の北端勝本では、旅の余録ともいうべきいい人にでくわした。たとえば須藤資隆という青年に出くわした事など」(街道をゆく13)と記された勝本町の須藤資隆教育長のご説明、焼酎とういの工場見学の後、ジェットフォイルで対馬に渡海。厳原のぎおんで昼食、厳原町教委から各人に「厳原町の文化財」の贈呈、小磯嘉文文化財係長と尾上博一主事のご案内で、丸半日をかけて西山寺・金石城跡・万松院(佐伯徳信住職よりご説明)・元寇古戦地小茂田浜・椎根の石屋根倉庫を訪ねました。上見坂展望台にも立寄り、美津島の対馬グランドホテルで泊。筆者を含め数人はふとん部屋。

最終日、万関橋・和多都美神社・烏帽子岳を訪れた後、厳原に戻り県立対馬歴史民俗資料館で斎藤弘征課長より朝鮮通信使関係の展示品等の説明をしていただき、志まもとで昼食後、ジェットフォイルで博多に戻りました。少し強行軍で宿泊等にもご不便をお懸け致しましたが、全員無事に帰着できました。

